

片山洋子、小川政弘作 「我、勝てり」

(効果音) (目覚まし時計のベルの音。プツンと止める音)
森田泰子 ううん… 5時? もう少し寝かせてよ。ううん… あ、いけない。ジョギングの時間だったんだ!

(音楽) (ブリッジ。コミカルな感じ)
ナレーション 慌てて外へ走り出した女の子、名前は森田泰子。青春中学の3年生。授業中は小さくなっているけれど、放課後のクラブ活動になると、打って変わって生き生きとしてくるスプリンター、陸上部の花形です。さて、放課後――。

小沼里美 ねえ、泰子。今度の大会の代表はだれだろうね? もちろん泰子が入るだろうけど。

泰子 まあね。短距離走はイタダキだね。定員は2人だから、あとは美鈴ぐらいかな。やるわ、最後の大会だもん。

里美 そうか。3年連続優勝ねらってるのね、泰子は。何しろいまだかつてだれもやったことないんだもんね。

(効果音) (「ピー!」とホイッスル音)
コーチ 集合! えー、これから、2週間後に控えた大会の出場者を発表するぞ。男子3000メートル、池田、関口、森山、岡島、吉村、田村、中川、岡田…。

泰子(モノローグ) (コーチの声をバックに) やるわよ、3年連続優勝。2年で勝った時から、これ一本に的絞って、朝5時から自主トレしてるんだもん。こうなったら絶対やってみせるから。

コーチ …最後に女子100メートル。田村美鈴、浅井聖。以上だ。自主トレに戻れ。解散!

(効果音) (驚きのガヤ)
男子部員 おい、女子100メートルに森田が外されたぞ。
女子部員 浅井さんですって。
里美 や、泰子…。
泰子(モノローグ) そんな、どうして…?
浅井聖 (近づいて) 泰子、ごめんね。
泰子 聖…。
聖 ごめん。だけど走らせて、100メートル、わたしに。最後のチャンスなの。お願い!(走り去る)
里美 なあに、あれ? 勝手なこと言って。(泰子、走り出す) あ、泰子、どこ行くの? 泰子!
(間。泰子、コーチのところに行く。)

泰子 コーチ、話があります。

コーチ なんだ、森田。練習中だぞ。

泰子 練習も何もありません。選手に選ばれないなら、練習なんか…。

コーチ 森田。お前はこれまで2年連続して優勝した。お前の足は皆が認めてる。だから最後の大会くらい、まだ日の目を見ていない浅井を出してやってもいいだろう。やつのタイムも上がってるし…。

泰子 (かぶせて) どうして100メートルなんですか？ほかの種目でもいいじゃないですか。どうしてわたしより遅い人を出すの？いつも「スポーツの世界は甘くないぞ」って言ってたの、コーチでしょ?!(走り去る)

コーチ 森田！（モノローグ）お前はまだ走れる。あとがあるんだ。しかし、浅井は…。

ナレーション 次の日の放課後——。

男子部員 はい、柔軟はそこまで。インターバルやるよ。後ろからな。よーい、小沼
(効果音) (「ピツ」とホイッスル)

里美 はい！（走り去る音）

部員 (口々に) ファイト！ ファイト！ ファイト！

男子部員 森田。

泰子 はい。(走り去る)

聖 あ、痛っ！（泰子にぶつかって倒れる）

泰子 聖、ごめん。コーナーであんなに近づいてくるんだもん。

男子部員 おい、大丈夫か？

女子部員 どうしたの？ぶつかったの？

聖 あ、足…。足から血が…。

泰子 少しだけよ。切れたんじゃないから大丈夫よ。

聖 コーチを。コーチを呼んで。

男子部員 おれ、呼んでくるよ。

泰子(モノローグ) 何よ。ただぶつかっただけじゃない。ほら、またコーチだ！

コーチ 大丈夫か、浅井？あ、血が。おい、だれか救急車を呼んでくれ。さ、捕まって。止血しなければ。

泰子(モノローグ) な、なんなのよ、あれは？どうしてあれくらいで救急車なんて。どうなってるのよ、全く。でも、あれだと大会はムリかもしれないわ。そうすれば…。

ナレーション ところが、泰子の予想とは裏腹に、聖はその日から早速入院してしまったのです。

聖の母 ビックリしたわ。練習中にケガをしたって言うから、どんなひどいケガかと思ったら、ねえ、あなた？

聖の父 ああ、本当だ。大したことなくてよかったなあ。お前の神様のお守りだったんだろう。

聖 うん。わたしも血を見たときはビックリしちゃった。“とうとう来た”って。でも大丈夫、イエス様がいてくださるから。

母 聖…。

父 まあ、輸血もわずかで済んだし、「これ以上出血しないように、安静にしてなさい」って主治医の先生もおっしゃってたことだから、学校のほうは少し休むことにしような。

聖 うん。今まで練習であまりできなかった聖書とお祈りがたっぷりできるわ。(モノローグ)入院…か。もう一度、家に帰る日が来るのだろうか？

白、血、病…。

(音楽) (ショッキングな感じ)

ナレーション 日ごろは、クリスチャンとして暗い陰など少しも見せたことのない聖でした。でもケガをした時の、彼女の血に対する異常なまでの反応は、この病気が原因だったのです。若い彼女の体を蝕んでいたのは、そう、血液のがんと言われる白血病でした。次の日、学校で――。

コーチ (遠くから)あ、森田、ちょっと！

泰子 为什么呢？

コーチ まあ、掛けろ。ほかでもない、浅井のことなんだが。

泰子 聖、入院ですって？ でも大したことないでしょ？

コーチ いずれ分かることだが、お前には知らせておく。浅井は… 白血病なんだ。

(音楽) (暗い感じ)

コーチ 半年ほど前に分かったらしいんだが、あとせいぜい半年ほどしかもたんだらうということだ。それで、あいつに、文字通りのラストチャンスをやろうと思ったんだが、あのケガでは無理だらう。そこで、今度の大会は、望みどおり、森田、… どうした森田、顔色が悪いぞ。

泰子 失礼します！（走り去る）

コーチ (オフ)おい、森田！

ナレーション 泰子の頭の中は、まるで激しいあらしが吹き荒れているようでした。

聖 (エコー)わたしに走らせて。最後のチャンスなの。お願い！

泰子 (エコー)でも、あれだと大会はムリかもしれないわ。そうすれば…。

コーチ (エコー)浅井は、白血病なんだ。あと3か月だ。これでお前の望みどおり…。

泰子 (かぶせて)やめて！ わたしがぶつからなきゃ。あの時、ぶつけてなければ…。聖、死なないで。お願い、治って大会に出て！…わたしのせいで、わたしのせいで、聖、ごめん！（泣き崩れる）

ナレーション 気がつくと、病院の前でした。しかし、泰子はどうしても聖の前に出ることができませんでした。自分の野望を実現させるために、偶然とはいえ、友を永遠に取り返しのつかないところに追いやってしまった罪の重さが、その時の彼女を

打ちのめしていたのです。

彼女はその夜、まんじりとししないで机に向かい、聖へのおわびと、心の軌跡をありのままに書き記して手紙を出したのです。そして、大会まであと数日と迫ったある日——。

泰子(モノローグ) あ、手紙だ。それに、カセットテープ？

ナレーション 手紙には、聖の母の筆跡で、聖の具合が非常に悪くなったこと、「もう手紙を書く力がないので、吹き込んだテープを聴いてほしい」と書いてありました。泰子は、胸の動悸を抑えながら、スイッチを入れました。

聖 (フィルター音)(カセットの声、弱々しく)神様、今わたしは、恐れています。お見舞いに来てくださった人たちが帰ったこの時間。病院の夜が始まるこの時間がとても怖いのです。夜のやみの中にスーッと引き込まれてしまうみたい。

(効果音) (測定器の音、救急車のサイレン)

聖 (フィルター音)あの脳波を測る器械の音も、救急車のサイレンも、わたしを神様から離れさせるサタンの声みたいに聞こえる。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか？ 艱難ですか？ 苦しみですか？ …どんなものも神の愛から私たちを引き離すことはできません。」神様、このように聖書にはつきりと約束されていますから、ありがとうございます。わたしは信じます。神様、どうか、いつもわたしの心の中に平安を与えてください。血が止まらなくなったときも、痛くて苦しい時も、そして、死ぬ…その時も。また、お父さんとお母さんの心も、いつか天国でまた会えるのだから、悲しみすぎないようにしてください。神様、できれば、もっと生きていたいのです。すてきな恋もしたいし、ウエディングドレス、赤ちゃん、そして一度でいいから、陸上の大会に出てみたかった。聖は最後まで力いっぱい生きてって、お父さんは、お母さんやクラスのみんなに知ってもらうために——。

(効果音) (カセットのスイッチがカチャッと切れる)

、 泰子、聞いている？ 父と母に残すつもりで、ここまで吹き込んだところで、あなたの手紙が届きました。母に読んでもらったあとで、このテープ、泰子にも聴いてもらいたいので贈ります。わたしのケガのことは、泰子のせいじゃない。だから心配しないで。自分を責めないで。神様のなさることはいつも最善です。それより泰子、100メートル頑張る。わたしの分も。泰子だったらできるよ。イエス様に祈っています。

ナレーション そして、大会の日——。

(音楽) (リズムカルな感じ)

(効果音) (陸上競技風景)

審判 位置に就いて。用意、(ピストル音「バーン！」)

(効果音) (応援の歓声)

ナレーション 夢中でゴールに飛び込むまでの十数秒間、泰子は生まれて初めて、「神様、勝たせて。聖のために勝たせて！」と心の中で叫んでいました。

(効果音) (泰子のゴールインに、一段と高い歓声)

泰子(モノローグ) 聖、やったよ！ あなたよ、あなたが勝ったのよ！

ナレーション 表彰台上った泰子は、流れ出る涙をぬぐおうともせず、今しも消えゆく命に呼びかけていました。11月の空は、^{あま}天がける聖の魂を包み込むかのように、抜けるような青でした。――

<完>